

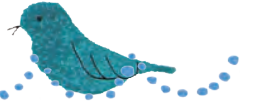


我孫子通信

文人の郷だより

令和4年度春号

通信第七



辻説法

館長のつぶやき



第9回 鴨の話

▶志賀直哉の小説「十一月三日午後の事」は大正7（1918）年11月3日に志賀直哉が体験した事実を、本人の言葉を借りると「事実そのままに書いた日記である」。小説のあらすじとしては、利根川に面した我孫子の柴崎に鴨を買いに行った志賀と思しき主人公が、無理な行軍演習途中で熱中症により倒れた兵士たちを目撃し、怒りを覚えつつ自らを内省する、といったものである（詳しくは我孫子市文化財報告『志賀直哉「十一月三日午後の事」を歩く』を参照にされたい）。



戦後、手賀沼で行われていた鳥獵の様子。長い網を張り、鳥を捕まえた

▶ここで注目したいのは志賀が柴崎の「鴨屋」を訪れた、ということである。「十一月三日～」の「草稿」には、農閑期の村の80人ほどが税金を払って水田に網を張る組織的な鳥獵を行っていることが書かれる。しかも獲ったカモをいけすで飼って

おき、必要に応じて東京に出荷している、ということだ。志賀が求めたのは「青くびの鴨」つまり冬の渡り鳥であるマガモで、「鴨屋」といっても稲作農家の余業であったが、使用する網は「張切網」という長大な網で、片手間でできるようなものではない。組織だったプロの技である。

▶なぜ、ここまで農家の人々が鴨獵に勤しむのかというと、手賀沼周辺の鴨は高く買い取られ、貴重な現金収入になったからだ。「草稿」には「雁は番つがいくら位かね」「八円ですネ」「中々高いな」と鴨屋の主人と生々しい？やり取りが記される。手賀沼での鳥獵と江戸・東京での「鳥食文化」を研究している菅豊すがゆたかによると、江戸の鳥食は將軍から下級武士、裕福な町人や文人墨客まで広がっており、料理人、鳥商人や密売人、流通や供給を支える江戸近郊の村の獵師や密獵者など多彩な人々がそこに関わっていた。明治になると更に鳥料理屋があちこちに作られる。上野広小路の「山下の雁鍋」は、



旧井上家住宅に残っていた水鳥を獲るための許可証（鑑札）。江戸時代、手賀沼で鳥獵が行われていたことがわかる

夏目漱石や森鷗外、正岡子規など作家たちが行きつけており、「吾輩は猫である」や「雁」にも描かれる（菅豊『鷹將軍と鶴の味噌汁』）。

▶鴨好きは志賀だけではなく杉村楚人冠も同様であった。随筆『続々湖畔吟』には「十一月の中頃に出入の鳥屋で青頸を注文したら『旦那まだ頸が青くならねえからだめでさ』という返事で驚いた。」とある（「かも」）。そもそも杉村は『アサヒグラフ』で手賀沼周辺の鳥獵を取材したことがきっかけとなって我孫子に居を構えることになったのだ。杉村は広大な庭にやってくる鳥を観察し、家禽を飼い、その様子を随筆に記し、高じて日本野鳥の会の設立メンバーに加わっている。

▶志賀も鳥を食べるだけでなく、飼った。「十一月三日～」では食べる気を失った鴨を自宅の池で飼おうとした。「矢島柳堂」には「^{ぼん}鶴」と「百舌」を飼う主人公 矢島柳堂の姿が描かれるが、鳥の描写が細やかに描かれ、志賀の実体験であったことを推測させる。

▶散漫な文章になったが、一つ言えることは、味わうにせよ、飼うにせよ、鴨に代表される鳥と人との距離の近さである。それを可能としたのが、手賀沼のほとり、我孫子なのだろう。



『野鳥』創刊号（鳥の博物館蔵）発起人の中に杉村楚人冠（広太郎）がいるのがわかる。楚人冠の隣は民俗学者の柳田国男



自宅で伝書鳩を飼って、記事を東京にある朝日新聞社に送っていた。

お知らせ

辻説法でご紹介した我孫子市文化財報告第17集『志賀直哉「十一月三日の事」を歩く』、我孫子市文化財報告第19集『志賀直哉「雪の日」と「雪の遠足」を歩く』好評発売中です！本を片手に志賀直哉が歩いた道を歩いてみませんか（各500円）

販売所：我孫子市教育委員会（文化・スポーツ課）
白樺文学館、杉村楚人冠記念館
市役所（行政情報資料室）

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

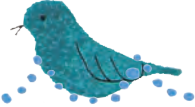
●春、冬の間、土に眠っていた生命が一齐に芽吹く華やかな季節です。そこで、テーマは「植物」としました。志賀直哉、杉村楚人冠は身の回りにある植物を彼ら独自の筆法で描写しています。その文を読み解く学芸員もまた様々な切り口で志賀、楚人冠を紹介しています。●梅の木といえば、我孫子市指定文化財の旧井上家住宅にも素晴らしい香りが楽しめる梅の木があります。市 Facebook で開花をお知らせしていますので、ぜひお越しください。（K）



テーマは「植物」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



志賀直哉、武者小路実篤、柳宗悦ら白樺派は、『白樺』の雑誌の名の通り、植物への関心は高いように思う。思い出したのは志賀直哉「八手の花」（一九五七）だ。どうしてこのタイトルをつけたのかはわからないが、読み返してみると、子どもが八人いたからではないかと思った。内二人は我孫子で赤子でなくなり、六人は成人し、そのうちの一人が山田家に嫁いだ五女田鶴子氏であり、山田家コレクションの寄贈者山田裕氏の母である。この作品は以前弊館のイベントでも扱ったが、実に志賀らしい。一部引用する。

「私は今、七十四歳で、前に考へてゐた事から云へば何も書けなくなつてゐる筈なのに、未だに何かこまぐくしたものを書いてゐるが、それは知らずくに、画家が描くやうなものを文章で書いてゐたやうな気がする」
確かに志賀は情景描写にすぐれており、志賀のこの振り返りは興味深い。また次のように続く。

「私は所謂小説らしい小説を書きたいとは思はないが、仮りにさう思つたとしても、そのために自分が嫌ひになつた人事のイザコザを見たり聞いたりする気にはならない。」

正直、私は歴史学が専門であり、つまるところ歴史は人間同士の争いの記録でもあるから「イザコザ」を見るのが好きな人間であるから志賀作品に魅力を感じなかつた。しかしありのままの日常の中で美しいもの、志賀が関心をもつたものを描いていたということ、志賀が改めて取材するような気持ちで題材を探さないために、「小説らしい小説」ではないことが段々わかると、志賀文学の見方が変わってきた。

「あと何年生きられるかわからない。又、生きてゐても頭が駄目になつて了ふ事も近頃は頻りに考へられるのだが、それでも兎に角、一人の人間として、この世に生れて来た事に就いて、何ものにも捕はれる事なく、もう少し、自分なりに、考へてみたいといふ気がある。」

私も今年から、より一層この気持ちで生きてみたいと思つている。新年度、新たな始まり。良いこと、悪いことと多々あれども、皆様の平穩無事と、孤露泣の終息を祈る。（稲村 隆）

志賀直哉用紙

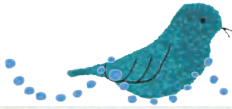
コラム「我孫子から」について

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語

杉村楚人冠記念館
学芸員コラム



フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

「桜伐る馬鹿、梅伐らぬ馬鹿」とは俗によく言うところですね。桜は幹や枝を切るとその部分が衰弱してしまうけれど、梅は余計な枝を切らないと花や実の付きが悪くなる、という木の性質に合わせた手入れを説いた言葉です。しかし、手入れのことだけでなく、花の楽しみ方についても「桜伐る馬鹿、梅伐らぬ馬鹿」は通用する気がします。

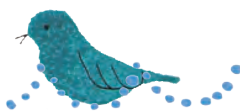
杉村楚人冠に言わせると、「桜は千枝萬朶咲き乱れて雲か霞かと見まがふばかりなる」のを少し離れて見るのがよく、一輪二輪をまじまじと見るものではない。一方梅は、「一枝折り取つて瓶に挿せば、その枝ぶりに『疎影横斜』の姿を見せ、その花の香に『暗香浮动』の妙味があつて、誠によろしい」ものですが、遠くから見てはただ白いばかり。これを読んだとき、本来の意味とは違うのですが、「桜伐る馬鹿、梅伐らぬ馬鹿」という言葉が自然と思ひ浮かびました。

では、杉村楚人冠が愛し、多くの木を集めたツバキはどうでしょうか。桜や梅と違って、ツバキは一気に満開になるということがあります。同じ木の中にも早く咲く花と遅く咲く花とがあります。そのおかげで長く花を楽しむことができますが、咲いたばかりの美しい花から落ちる寸前の色あせた花まで入り乱れるのは欠点になります。楚人冠が「これを一目に見るのは興がさめる」と評するのはこの欠点のことです。そこで楚人冠の結論は「椿は一輪二輪を活けて楽しむをよしとす。そのさはやかな花の色 その黒ずんだような青葉 その仙骨を帯びた枝振 皆愛すべし。立木のまままで観るべき花ではない」となります（ここまでの引用は『続々湖畔吟』所収「花遠近」）。

杉村楚人冠記念館ホームページの写真を担当する身としては、まこと楚人冠先生の言うとおり、と痛感します。ツバキの写真撮るのに苦労する原因は色あせた花なのです。咲いたばかりでないと花びらのどこかが欠けていたり、端が黄ばんでいたり、あるいはせつかくきれいな花を見つけても隣の色あせた花と一緒に写ってしまったたり、文句なくきれいなだけの写真はなかなか撮れません。観賞と同様、撮影にも心得があるようです。（高木 大祐）



イベント情報



杉村楚人冠記念館											
3月15日~5月15日 「楚人冠がみた舞台芸術 —オペラ・演劇・舞踊」展			●8月11日楚人冠講座								
5月21日~7月10日 「寄贈資料」展			7月12日~10月2日 杉村楚人冠生誕150年記念展示 「杉村楚人冠の青少年時代 —名ジャーナリストの原点を探る—」								
5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
●復活！稲村雑談 6月5日、18日、22日、29日											
●復活！稲村雑談 7月1日、9日、16日、27日											
●復活！稲村雑談 8月3日、11日、20日、28日											
3月1日~9月25日 常設テーマ「民藝運動と我孫子」展						10月1日~1月29日 企画展「甲斐仁代生誕120年記念 甲斐仁代と原田京平—志賀直哉邸に集う画家たち—」展					
白樺文学館											

■杉村楚人冠記念館

令和4年3月15日（火）～5月15日（日）

企画展「楚人冠がみた舞台芸術 —オペラ・演劇・舞踊」

杉村楚人冠には舞台芸術とも縁の深い新聞記者でした。女性の新しい職業への偏見に屈することなく活躍の場を広げていった女優森律子やオペラ歌手三浦環・原信子、一時は芸者として身を立てながら舞踊の道を進み家元と対立するや自ら一派を興し活躍した藤蔭静枝、杉村楚人冠の小説『うるさき人々』の舞台化に関わった新国劇の沢田正二郎、曾我廼家劇の曾我廼家五郎。楚人冠が関わった舞台芸術関係者を紹介します。そして最後に、一時はロンドンで演劇を勉強しようと志しながら、夢叶わず表舞台に立つことのなかった、ある女性の手紙にこめられた痛切な思いを……。

令和4年5月21日（土）～7月10日（日）

寄贈資料展

杉村楚人冠の遺墨や、楚人冠とともに俳句結社湖畔吟社で活動し、我孫子の人々に慕われた陶芸家河村蜻山の作品、さらに旧我孫子町ゆかりのものなど、縁あってご寄贈いただいた品々を集めて展示します。もとの所蔵者の方が大切に愛蔵してこられた、その思いも感じとってください。

令和4年7月12日（火）～10月2日（日） 杉村楚人冠生誕150年記念展示

「杉村楚人冠の青少年時代 —名ジャーナリストの原点を探る—」

旧暦明治5（1872）年7月25日、のちの杉村楚人冠こと杉村広太郎が和歌山の城下町に産声を上げてから、今年150年を迎えます。これにちなんで、この展示では広太郎が楚人冠を名乗るよりも前、青少年期の資料を集め、名ジャーナリストの資質がどのように培われていったのかを探ります。旧制和歌山中学時代に書いた日記、友人たちと切磋琢磨した交換雑誌、宗教について考えを深めた学校のレポート、若いエネルギーにあふれた資料の数々をご覧ください。



■白樺文学館

令和4年3月1日(火)~9月25日(日)

常設テーマ「民藝運動と我孫子」展

白樺文学館のコレクションの中から民藝運動と我孫子をテーマに展示を行います。

令和4年10月1日(土)~令和5年1月29日(日)

企画展「甲斐仁代生誕120年記念 甲斐仁代と原田京平—志賀直哉邸に集う画家たち—」

原田京平と同時期に滞在した画家甲斐仁代。原田に続く我孫子ゆかりの画家シリーズとしてご注目いただければと思います。

柳兼子愛用ピアノ BGM 演奏

参加費:無料(入館料のみ)

開館日は毎日市民スタッフによるBGM演奏を開催しています。11時~か13時~どちらか1時間程度の開催です。市民スタッフの登録者は35人。毎日来ても違う方の演奏で展示をご覧ください。

学芸員ギャラリートーク 復活!! 稲村雑談

参加費:無料(入館料のみ)

志賀直哉「稲村雑談」にあやかり、同名の学芸員による展示解説です。2年ぶりに復活です。今回から、展示解説のほかにトークテーマを設定、またピアノ演奏も加えたパワーアップした内容でお送りします。(定員:10人(要予約) 各回14時~1時間程度)

6月のトークテーマ「阿川佐和子さんのこと」「流行感冒」「山田家コレクション」ほか

6月5日(日) 18日(土) 22日(水) 29日(水) (一般予約開始日6/3)

7月のトークテーマ「志賀直哉と熱海」「大津絵」「文豪ブーム」ほか

7月1日(金) 9日(土) 16日(土) 27日(水) (一般予約開始日6/19)

※7月1日は市制施行日のため無料開放

8月のトークテーマ「原田京平のこと」「京都よもやま話」「我孫子から」ほか

8月3日(水) 11日(木) 20日(土) 28日(日) (一般予約開始日7/19)

9月のトークテーマ「我孫子ゆかりの画家たち」「城崎行き」「ぐるっと九州」ほか

9月4日(日) 11日(木) 17日(土) 23日(金) (一般予約開始日8/19)

場所 白樺文学館1階ピアノサロン

※2館共通年間パスポートをお持ちの方は予約なしでご参加いただけます。

YouTube 稲村雑談特別版第2弾—志賀直哉没後50年を偲んで—

阿川佐和子×山田裕×稲村隆

我孫子インフォメーションセンターアビシルベのYouTubeチャンネルで公開中です。ぜひご覧ください。YouTubeで「稲村雑談」で検索!!



※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お越しの際は、お問い合わせもしくは、市のホームページにて最新の情報をご確認ください。



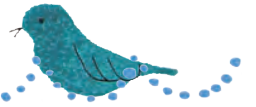


我孫子通信

文人の郷だより

令和4年度夏号

通信第八



辻説法

館長のつぶやき



第10回 青春時代～白樺派と杉村楚人冠

▶志賀直哉や武者小路実篤、柳宗悦たち白樺派の文人たち、そして杉村楚人冠は、どのような青春時代を送ったのだろうか？

▶白樺派の文人たちが「誕生」したのは、学習院高等科時代。明治36（1903）年前後の頃である。「新潮文学アルバム」の志賀篇や武者小路篇には写真が豊富に掲載されており、彼らが青春を謳歌していたことがわかる。

▶「学習院時代を語る」という座談会記録（『心』10-1、1957年、平凡社）がある。この座談会に参加しているのは、志賀直哉、細川護立、武者小路実篤、園池公致、柳宗悦、里見淳、長與善郎の7名。落第、休学などを経験している者が多く、学年の前後関係がかなり曖昧で、先輩後輩という厳しい前後関係は感じられない。その中でも志賀は最年長で、初等科から高等科まで足かけ17年学習院に在学したが、卑屈になっているという感じはまったくなく、逆に皆から尊敬を集めている。非常に面白い。

▶座談会で語られる彼らの学習院での青春時代は一言でいうと「痛快」。硬派を気取ってナンパな学生を鉄拳制裁。先生の力量を見透かして、良い授業

だけちゃんと聴き、気に入らないのはブーイング。スポーツにも打ち込み、長與の意見では三島弥彦（NHK大河ドラマ「いだてん」で生田斗真が演じた。ストックホルムオリンピック短距離走選手）が一番だったが、里見によると「志賀君が一番派手だったね、運動場においては」という評である。志賀はラグビーで三島にタックルを決めたが、大きな奴が頭の上に落ちてきて気を失ってしまい、学習院ではそれ以降ラグビー禁止になったそうな（今は違うかもしれない）。



大正13年8月京都山科での一コマ。学生時代から続き、家族ぐるみの交友関係に発展したことがうかがえる。

（白樺文学館蔵・原田家コレクションより）

左端が柳宗悦、その左が妻兼子、その二人目が志賀直哉

▶杉村楚人冠の青春時代という、一筋縄ではいかない。旧制和歌山中学校に入学し、先輩の南方熊楠（のち博物学者となる）と交友を結ぶが、高圧的な校長に反発して友人たちと合同自主退学した。ちょうど自由民権運動が盛んな頃（明治20年代）だ。心機一転、上京して英吉利法律学校（現：中央大学）に学び、帝国大学撰科を目指す。が体調不良から挫折。ネイティブから本格的に英語を学び、和歌山に戻って二十歳で新聞主筆を務めた。その後も、学生たちの間で広まっていた仏教改革運動に参加し、鈴木大拙（禅をZENとして海外に広めた）と交友するなど各方面の人脈を深めている。ここまでで、なんと20代前半である！「前向き」「不屈」という言葉がよく似合う青春時代だ。



和歌山中学時代の楚人冠（前列右）友人たちと撮影（杉村楚人冠記念館寄託）

▶白樺派と杉村の青春時代を眺めると、一方は社会の上流階層の子弟らしい明るさ、もう一方は庶民としてのたくましさを感じる。共通しているのは、好きなことに一途に取り組むこと。そして何より、友に恵まれ、大切にしていることだ。

▶7月12日から10月2日まで、杉村楚人冠記念館において、杉村楚人冠生誕150周年を記念した展示「杉村楚人冠の青少年時代一名ジャーナリストの原点を探る」を開催する。杉村がどのような青春時代を送ったのか、刮目して臨んでほしい。



恩師イーストレキ（中央）と（楚人冠は向かって左）（杉村楚人冠記念館寄託）

お知らせ

楚人冠の青年時代を読み解く『杉村楚人冠の青少年時代一名ジャーナリストの原点を探る』好評発売中です。展示ではなかなか紹介しきれない楚人冠の魅力余すところなくご案内します！

販売所：我孫子市教育委員会（文化・スポーツ課）、白樺文学館、杉村楚人冠記念館
市役所（行政情報資料室）

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

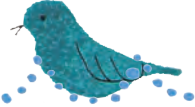
●今年はやい夏到来でしたが、蝉の声はまだ聞こえません。近年「例年どおりの気候」ではないのかもしれませんが。●我孫子は天気に縁があり、気象学者岡田武松（第4代気象台長）は布佐出身。岡田は颱風という言葉を作ったと言われています。●関東大震災を免れたものの伐られそうだったイチヨウを岡田が助けました。木は環境の変化に関係なく育ち、人びとの目を和ませました。自然の力強さを感じます。●来年は震災100年、各館の展示も注目です（K）



テーマは「天気」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



な気持ちになりたい (稲村 隆)

「今日の風はいつもと少し異^{ちが}ふやうだぜ」

志賀直哉「颱風^{たいふう}」(一九三四)の一節である。室戸台風を題材としたもので、奈良在住時の作品である。

「私たちは何となく快活になつてゐた。私は記憶からいつても暴風雨の後はいつてもかういふ気分になる」

このように記してはいるが、その被害は相当深刻なものである。「石燈籠の死骸^{うづま}で埋^{うづま}つてゐた」という描写からもそれはわかるだろう。さすがに志賀も新聞報道で大阪などの被害を知ったあとは、前述の「快活」な気分にはなれなくなっていたようである。

我孫子時代であればやはり雪だろうか。

「自分は雪だと妙に家にちつとしてゐられない癖があつた」「自分たちの胸には何となく快活な気分が往来している。」

我孫子時代の作品「雪の日」(一九二〇)である。やはり志賀は「快活」になつていた。志賀は状況の変化に對しての素直な心模様を記しており、そこに何かを危惧するようなことは最初からは思わないのかもしれない。残念ながら私にはもう台風や雪の予報となると憂鬱で仕方がない。志賀のあまりにも純粹な気持ちに頭が下がるとともに、さすが「白樺派」という思いがしてならない。

以前にも記したように思うが、私は梅雨が一番嫌いなため、梅雨を避けるように遠出をした。コロナも心配ではあつたが、秋からの展覧会に向けて佐賀、福岡を回つた。せつかく遠出をしたからと柳川にも行くこととした。北原白秋の出身地であり、鰻のせい蒸しが目当てである。とある御仁の案内で回つたが不思議なことに車に乗っているときや施設を見学しているときは大雨が降り、外に出ると止んでいた。天気は心を映すものであると思つた。悲しみの雨か、恵みの雨か。雨降つて地固まる。雨も滴るなんとやら。早く戻り梅雨が明けて、私も「快活」

志賀直哉用紙

コラム「我孫子から」について

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語



フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

皆さんは、仕事に行こうとしたら雨が降っていて、一気に気分が沈み憂鬱になったという経験があるだろうか。私はある。快晴の日でも、こんな天気の良い日に仕事に行くのかと憂鬱な気分になるが、ここでは触れない。雨というのは何故だか、空模様だけでなく人の心までどんよりとさせるものである。雨の日は何も考えずに、ただ雨音をBGMにして、家の中で読書でもしていたい。しかし、仕事をしている以上、そんなだらけたことも言っていられない。

関東大震災の後、楚人冠は一家で我孫子に引っ越してきたが、勤め先は東京朝日新聞社であったため、仕事の日は我孫子から上野まで、汽車で通勤をしていた。当然、新聞記者に天気など関係ないから、雨の日も出勤していた。しかし、当時の我孫子の人々はそんな楚人冠を不思議に眺めていたようである。その様子を、楚人冠は随筆「なまけもの」(『湖畔吟』所収)に書き記している。

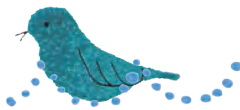
或る雨の日に私が東京へ勤に出かけると、道で逢ふ人は皆『この雨の降るのにお出かけですか』と挨拶する。(中略) この土地では百姓か 土方か 植木屋か 左官か 戸外で仕事するものばかりと言つてもいゝ位だから、雨が降りさへすれば休むものと定めてある。(中略) 雨の日にすたこらと出かけて行く私が、さぞかし馬鹿に見えたことであらう。

この記述から分かるように当時の我孫子の人々は、晴耕雨読を体現していたのである。どうやら家の中ではお喋りをし過ぎておぼろげにいたようなので、晴耕雨談といった方が正しいかもしれないが、それにひきかえ、楚人冠や現代日本人はどうであろうか。例えば土砂降りの雨に全身を濡らしても、仕事に行かざるをえない。雨ならまだしも、突風や雪の日でさえ、出勤する人は出勤をする。なんとむごいことか。

そんな当時の我孫子の人々の生活に思いを馳せながら、晴れの日も雨の日も、私はかつての晴耕雨読の地へ仕事に向かうのである。(武藤真奈)



イベント情報



杉村楚人冠記念館											
<ul style="list-style-type: none"> ●8月6日・7日ワークショップ ●8月11日楚人冠講座 ●9月25日講演会 											
7月12日～10月2日 「杉村楚人冠の青少年時代」			10月8日～1月9日 「手紙に見る歴史の断片」展				1月11日～3月5日 「てがみ展 楚人冠の仕事を支えた人びと」展				
8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
<ul style="list-style-type: none"> ●復活！稲村雑談 8月3日、11日、20日、28日 ●復活！稲村雑談 9月4日、11日、17日、23日 											
3月1日～9月25日 常設テーマ 「民藝運動と我孫子」展			10月1日～1月29日 企画展「甲斐仁代と原田京平」展								
白樺文学館											

■杉村楚人冠記念館

令和4年7月12日（火）～10月2日（日） 杉村楚人冠生誕150年記念展示
「杉村楚人冠の青少年時代 ―名ジャーナリストの原点を探る―」

杉村楚人冠生誕150年を迎えることにより、本展示では青少年期の資料を集め、名ジャーナリストの資質がどのように培われていったのかを探ります。

令和4年10月8日（土）～1月9日（月・祝）
冬期企画展「手紙に見る歴史の断片」

楚人冠の手元には教科書に載るような歴史に係る重要な手紙が残されています。一つ一つの手紙からその歴史の背景を探ります。

令和4年8月11日（木・山の日）10時～11時 生涯学習センターアビスタ 第二学習室
第11回楚人冠講座「楚人冠の青少年時代」 参加費：無料

杉村楚人冠が自らの青少年時代を回想した随筆「其の跡」をテキストとして使用し、楚人冠の青少年時代とジャーナリスト以前の事績を紹介します。

定員：30人（要予約、我孫子市民図書館：04-7184-1110）

令和4年9月25日（日）14時～（開場13時30分）生涯学習センターアビスタ ホール
講演会「杉村楚人冠から折口信夫へ」 講師 安藤礼二氏（多摩美術大学教授） 参加費：無料

杉村楚人冠が新聞記者になる前の活動にスポットを当てた夏期企画展に合わせて、杉村楚人冠から藤無染、折口信夫へ至る系譜について明らかにした安藤先生にお話しいただきます。

定員：50人（要予約・先着順）

年間パスポートをお持ちの方は、8月16日（火）午前9時～先行予約を開始します。

申し込みは杉村楚人冠記念館（04-7187-1131）までお願いします。



■白樺文学館

令和4年3月1日(火)～9月25日(日)

常設テーマ「民藝運動と我孫子」展

白樺文学館のコレクションの中から民藝運動と我孫子をテーマに展示を行います。

令和4年10月1日(土)～令和5年1月29日(日)

企画展「甲斐仁代生誕120年記念 甲斐仁代と原田京平—志賀直哉邸に集う画家たち—」

原田京平と同時期に滞在した画家甲斐仁代。原田に続く我孫子ゆかりの画家シリーズとしてご注目ください。

柳兼子愛用ピアノ BGM 演奏

参加費:無料(入館料のみ)

開館日は毎日市民スタッフによるBGM演奏を開催しています。11時～か13時～どちらか1時間程度の開催です。市民スタッフの登録者は35人。毎日来ても違う方の演奏で展示をご覧ください。

学芸員ギャラリートーク 復活!! 稲村雑談

参加費:無料(入館料のみ)

志賀直哉「稲村雑談」にあやかり、同名の学芸員による展示解説です。2年ぶりに復活です。今回から、展示解説のほかにトークテーマを設定、またピアノ演奏も加えたパワーアップした内容でお送りします。(定員:10人(要予約) 各回14時～1時間程度)

7月のトークテーマ「志賀直哉と熱海」「大津絵」「文豪ブーム」ほか

27日(水) (一般予約開始日6/19)

8月のトークテーマ「原田京平のこと」「京都よもやま話」「我孫子から」ほか

8月3日(水) 11日(木・祝) 20日(土) 28日(日) (一般予約開始日7/19)

※8月11日は楚人冠講座講座が午前中にあります。併せてご参加ください!

9月のトークテーマ「我孫子ゆかりの画家たち」「城崎行き」「ぐるっと九州」ほか

9月4日(日) 11日(日) 17日(土) 23日(金・祝) (一般予約開始日8/19)

場所 白樺文学館1階ピアノサロン

※2館共通年間パスポートをお持ちの方は予約なしでご参加いただけます。

YouTube 稲村雑談特別版第2弾—志賀直哉没後50年を偲んで—

阿川佐和子×山田裕×稲村隆

我孫子インフォメーションセンターアビシルベのYouTubeチャンネルで公開中です。ぜひご覧ください。YouTubeで「稲村雑談」で検索!!



※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お越しの際は、お問い合わせもしくは、市のホームページにて最新の情報をご確認ください。



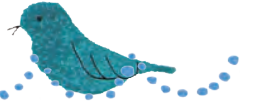


我孫子通信

文人の郷だより

令和4年度秋号

通信第九



辻説法 館長のつぶやき



第11回 コロナにやられた件～志賀直哉との共感

▶私事ながら、コロナにやられた。第7波オミクロン株という奴だ。熱は38度くらいだったが、酷く喉が痛む。どれくらい痛いかというと、金だわしで喉の内側をゴシゴシこすりつけたような痛さだ。そんな状態が一週間続いた。

▶大正7(1918)年、世界的パンデミックとなったスペインインフルエンザは、日本では「流行感冒」と呼ばれた(このシリーズ第1回でも取り上げている)。我孫子に住んでいた志賀直哉も流行感冒に罹患し、その顛末を小説「流行感冒」に記した。

▶志賀自身と思われる主人公は、流行感冒に罹患する前、「私はそれでも時々東京に出た。そして可^こ恐^わ可^ご恐^わ自動電話を掛けたりした。」と記すが、「自動電話」とは明治33(1900)年以降東京に普及していった「公衆電話」のことである。アメリカで“Automatic Telephone”と呼ばれていたのを直訳したらしい。5銭もしくは10銭を入れて交換手に繋いでもらう形式だから、ちっとも自動ではない…いずれにしても不特定多数が触ってしゃべりかける公衆電話が流行感冒を媒介しているのでは?という疑いを持っていたようだ。

磁石式公衆電話機 共電式公衆電話機 4号自動式委託公衆電話機 4号自動式ボックス公衆電話機

1900



明治33年
明治33年9月、それまで電信局・電話局内の電話所だけにしかなかった公衆電話が、初めて街頭に進出した。まず、上野・新橋の両駅構内の2カ所に設けられ、翌10月には、最初の屋外用公衆電話ボックスが京橋のもとに建てられた。以後、その数は次第に増え、明治末には全関東で463台を数えた。当時、「自動電話」と呼ばれていたが、これはアメリカの街頭電話に表示されていた「オートマテックテレホン」をそのまま直訳したといわれている。
大正14年、自動式の導入を機会に現在の「公衆電話」に改められた。
特徴
5銭、10銭と2つの硬貨投入口があり、料金が落ちる途中、5銭はゴング(チーンという音)、10銭はらせん状の鐘(ボンという音)を鳴らし、料金投入を交換取扱者に知らせた。

1903



明治36年
共電式交換方式の採用にともない、共電式公衆電話機が登場した。これは、以後昭和27年頃まで長期にわたり使用された代表的な公衆電話機である。
この間、自動交換方式の採用により、公衆電話機のダイヤル化が検討され、昭和5年、M-28形自動式公衆電話機5台をドイツから輸入、これをもとにSH形自動式公衆電話機55台が試作された。
東京、大阪などで試験的に使用されたが、料金収納装置などに不備な点が多く、公衆電話の自動化は、ついに戦後に持ち越された。
特徴
外観は磁石式公衆電話機と類似しており、交換局を呼び出す磁石発電機がないのでハンドルが付いておらず、やや小型である。

1953



昭和28年
戦災による電話の破壊、更に復興への動きと電話需要の増大などが相まって電話不足の悩みは深刻となった。
このようなことから通信機関の拡張を図る目的で考えられたのが公衆電話機の店頭設置であった。
この制度は2種類あり、1つは「簡易公衆電話」で、一般の加入電話を店頭に出してもいい公衆の利用に供するもの(昭和26年11月施行)、いま1つは公社の電話機を店頭に置いてもらう「委託公衆電話」(昭和26年12月施行)である。これらの電話機は普通の4号電話機が使われていたが、昭和28年8月からは、よく目立つ赤色に変えられた。このうち、委託公衆電話が後の「赤電話」となった。
特徴
加入者用4号自動式卓上電話機のきょう体、送受話器及びコードなどを赤色にしたもの。

1953



昭和28年
戦後、硬貨の流通不足から、公衆電話料金の収納に紙幣を使わざるを得なくなり、硬貨投入口を紙幣用に改造した共電式公衆電話機が使用された。これは、回路的に料金投入と通話に関連がなく、無料通話が可能であった。
しかし、昭和27年から10円硬貨が流通し始めたため、翌年1月、硬貨による公衆電話として4号自動式ボックス公衆電話機が採用された。これが青電話機の第1号である。なお、10円玉を入れる委託公衆電話である赤タルマは翌29年11月、新宿に第1号が設置された。
特徴
青電話には当初「ボタン付後払式」が採用された。これは、ダイヤルを押して相手が出たらボタンを押して10秒以内に10円硬貨を投入して通話した。しかし、10秒以内なら無料通話となる欠点があった。
*同系機種
4号自動式委託公衆電話機

公衆電話料金	明治23年	30年	32年	33年	36年	39年	大正13年
	市内	電話所において開始 1通話時(5分以内)5銭	1通話時(5分以内)10銭	1通話時(5分以内)15銭	自動電話と称す	特別加入区域内との通話10銭 その他 5銭	1通話(5分)5銭
市外				1通話25銭以下(100km以内)の区間との市外通話の取り扱い			

「公衆電話機のうつりかわり」NTT 東日本広報室の資料より

▶「四十度近い熱は覚えて初めてだった。腰や足が無闇とだるくて閉口した。しかし一日苦しんで、翌日になったら非常によくなった。ところが今度は妻に伝染した。(中略)間もなくきみが変になった。(中略)しかし暫くするとこれはとうとう肺炎になってしまった。今度は東京からの看護婦にうつった。(中略)しまいには左枝子にも伝染ってしまって、健康なのは前にそれを済ましていた看護婦と、石とだけになった。」

▶志賀の描写によると、流行感冒は感染力がとても強く、家庭内感染を引き起こした(主人公→妻→きみ→東京から来た看護婦→左枝子)。症状としては、足腰のだるさを感じて、主人公のように熱がすぐに収まることもあるが、女中のきみのように、こじらせると肺炎に至ることもあったようだ。また、(地元の)看護婦と女中の石のように「前に済ましていた=免疫を獲得している」者には感染しない、という認識がすでにあったようだ。

▶「流行感冒」に対しては、その頃盛んになりつつあった細菌研究の成果を活かし、ワクチン療法などが試みられたが、効果は無かった。光学顕微鏡ではインフルエンザウィルスを確認できなかったからだ。栄養状態、生活環境が良く、当時猛威を振るっていた結核に罹患していなければ、インフルエンザそのもので命を落とす人はさほど多くはなかったと考えられる。そのためか、流行感冒は忘れ去られた。残されたものは、「うがい、手洗い、マスク」という自己防衛手段で、今回のコロナでも世界に誇る?対策となったのだ。

▶それで、私事である。ワクチンを3回打ち、人並みに免疫力の強化に励み、うがい、手洗い、マスクも励行したつもりであったが、どこかでウィルスを拾ってしまい、酷い目にあった。私に残ったものと言えば、「流行感冒」に罹った志賀と共感できたことだ。



マスク啓発ポスター(国会図書館蔵)
志賀直哉が経験した「流行感冒」の時代に掲示された

コラム「辻説法」について

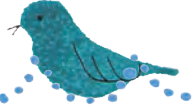
辻説法とは、人が集まる町角(=辻)で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感(編集後記)

●虫の声と梨を食べると秋を感じます。●梨は弥生時代からあり、江戸時代に栽培技術が発達し、明治になると「二十世紀」が松戸で生まれました。我孫子にも梨園がありますので、志賀も食べたかもしれません●今回は「食欲の秋」、お題は食べ物の話を想定しましたが、両学芸員から見事期待を裏切られ、個性的な切り口で志賀・楚人冠の魅力をご紹介できました●コロナで人との交流の大切を痛感しました。そろそろ友人と温泉に行きたいものです(K)

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



「大好物」といわれ、その程度を考えつつ全集をひもとくと志賀直哉は一九二七（昭和二）年の『婦人公論』による「名士と食物」というアンケートの回答に「あまご（魚の名）のからあげ、あんこう、これは但し東京のもの、河豚（下関にて一度食ったきりだが非常に美味と思つた）」という表記がある。河豚のエピソードはまた別の機会とするとして、当時住んでいた奈良での話を掘り下げたい。一九二五（大正一四）年四月から奈良市幸町、一九二九（昭和四）年四月からは同市上高畑に新築した家へと移り、一九三八（昭和一三）年東京に戻るまでの十三年の長きにわたり奈良に住んでいる。

「土地としては、関西の方が遥かに好きだが、人に就いていへば私はどうしても東京の方が好きだ。関西でも個人的には好きな人は少なくないが、一般的に云へば東京の方が遥かに好きだ。」（奈良）（一九三八）

「人事的な深いかかわりはなしだと、あつち（奈良）は極く住み好い。東京より余程好いと思ふ。しかし人的要素が入ってくるといけない。こつちのひとだと、交友範囲の関係もあらうが実に親しみ深く話などしても安心してゐられるが、あつちではさうはゆかぬ。こつちの連中に向ふへ移住して貰へば理想的なわけだが。」（『身辺雑感』（一九三八））

やはり志賀の大好物は、「人」「友」なのだろうと思う。終生、武者小路実篤、柳宗悦たちはじめ白樺派のメンバー、友人たちと常に交流し続けている。やはりそれは『白樺』同人たちの絆の深さを物語るのではないかと前述の言葉から考える。

私も大学時代の仲間たちを中心に三〇名前後の会を主宰しているが、長いものでは小学校以来の付き合いでもう二〇年を超える。程よい距離感で、お互い気遣いを持ち、何も気兼ねすることなく本音を語り合える会だ。コロナ前は定期的に会合を持ち、さまざまなことを語り合った。私も志賀と同様「人」が好きなだろう。今年はそのころ皆で集まって令和の白樺派を気取り、会合を開きたいと思っている。（稲村 隆）

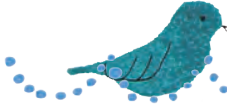


コラム「我孫子から」について
志賀直哉用紙

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語



フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

楚人冠は風呂が好きであった。毎朝五時半に入浴すると決めて、離れの風呂場まで、雨の日も風の日も歩いて行くほどに、好きであった。某国民的アニメに登場する少女と楚人冠が出会えば、それはそれは話に花が咲くのではなからうか。楚人冠はただ湯につかるだけではなく、植物や果物といった「いうべからざる趣を添えるもの」を湯の中に入れた。湯の中に何かしらを入れる一番の目的は、体がより温まるようにという現実的なものであったようだが、だんだんと香りや色もより良いものを欲するようになった。柚子や菖蒲といった現在でも手軽に家庭で使われるものをはじめ、大根の葉、朝鮮人參、蜜柑の皮、現在のバスクリンの前身である中将湯等、色々挑戦をしていたようだ。軟膏等に使用されるタール材の一種、星製菓のホシチョールを入れたこともあった。星製菓の社長・星一（ほしはじめ）（作家星新一の父）と会った際、この商品を褒めたところ、なんと星は十八リットルも追加で送ってきたらしい。ここまでくると、いくら貰い物でも、ありがたみが薄れそうである。果たして楚人冠は、星からのホシチョールを全て使い切れたのであろうか、気になるところだ。このように風呂を極めていた楚人冠は、ついに湯の形についても興味を持つようになる。

「アルプス鉱泉というものはどこからくるものか知らぬが、真白な細かい雲のようなものが湯の中で右往左往するさま、始終湯が動いているように見えてうれしい」（『湯の色』『続湖畔吟』所収）。

湯の香や色だけでなく、形にまで目をつける観察力は、流石としか言いようがない。ある種、子どものような思考の柔軟性があればこそ、楚人冠は名ジャーナリスト・楚人冠となりえたのであろう。少々話が脱線したが、ただ体を温めるもの、またリラックスをするためのものと認識をしている人が大半であろう風呂について、ここまで熱く語る楚人冠は、やはり面白い男である。今夜は楚人冠に倣い、香りが穏やかで半透明ほどの白さの湯につかり、ただじっと湯の形を感じるのも良いかもしれない。のぼせに要注意だ。（武藤真奈）



イベント情報



杉村楚人冠記念館											
●12月10日楚人冠講座											
10月8日～1月9日 「手紙に見る 歴史の断片」展			1月11日～3月5日 「てがみ展 楚人冠の仕事を支えた人びと」展								
11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
●復活！稲村雑談 11月23日 ●復活！稲村雑談 2月19日 ●復活！稲村雑談 12月4日 ●復活！稲村雑談 3月19日 ●復活！稲村雑談 1月15日											
10月1日～1月29日 企画展「甲斐仁代と原田京平」展			2月1日～ 常設テーマ展「白樺派と我孫子」展								
白 樺 文 学 館											

■杉村楚人冠記念館

令和4年10月8日（土）～1月9日（月・祝）

冬期企画展「手紙に見る歴史の断片」

ジャーナリストであった杉村楚人冠には、多種多様な立場の人々から、色々な手紙が送られてきました。その中には、現在の私たちが教科書で目にするような、歴史的な事件や戦争に関する内容のものもあります。当時の人々は、事件や戦争についてどのように感じ、心をうつす鏡である手紙にどのように綴っていたのでしょうか。今回の展示では、そんな手紙の数々から、大逆事件や2・26事件、日中戦争といった歴史と、当時の人々の心情を紹介します。

令和5年1月11日（水）～3月5日（日）

テーマ展示「てがみ展 楚人冠の仕事を支えた人びと」

ジャーナリストとして、東京朝日新聞社に勤めていた杉村楚人冠は、たくさんの仲間たちの協力のもと、仕事をこなしていました。そんな楚人冠の仕事を支えた人々を、手紙から紹介していきます。

令和4年12月10日（土） 10時～11時 生涯学習センターアビスタ 第二学習室

第12回楚人冠講座「楚人冠邸に生えたキノコ」

参加費：無料

杉村楚人冠邸の庭には、多くのキノコが生えました。不思議な魅力を放つキノコたちに、楚人冠は興味津々であったようです。そんな楚人冠がキノコに関して記した随筆を、市民図書館市民スタッフの朗読で味わい、学芸員の解説で理解を深めます。楚人冠について、またキノコについて学べる、お得な講座です。

定員：30人（要予約、我孫子市民図書館：04-7184-1110）一般受付：11月20日（日）開始
年間パスポートをお持ちの方は、11月18日（火）午前9時～18日（金）先行予約を開始します。
申し込みは杉村楚人冠記念館（04-7187-1131）までお願いします。



■白樺文学館

令和4年10月1日(土)～令和5年1月29日(日)

企画展「甲斐仁代生誕120年記念 甲斐仁代と原田京平—志賀直哉邸に集う画家たち—」

原田京平と同時期に滞在した画家甲斐仁代。原田に続く我孫子ゆかりの画家シリーズとしてご注目ください。

令和5年2月1日(火)～

常設テーマ展「白樺派と我孫子」

白樺文学館に所蔵されているコレクションを中心に展示を行います。

柳兼子愛用ピアノ BGM 演奏

参加費:無料(入館料のみ)

開館日は毎日市民スタッフによるBGM演奏を開催しています。11時～か13時～どちらか1時間程度の開催です。市民スタッフの登録者は30人以上。毎日来ても違う方の演奏で展示をご覧ください。

学芸員ギャラリートーク 復活!! 稲村雑談

参加費:無料(入館料のみ)

志賀直哉「稲村雑談」にあやかり、同名の学芸員による展示解説です。2年ぶりに復活です。今回から、展示解説のほかにトークテーマを設定、またピアノ演奏も加えたパワーアップした内容でお送りします。(定員:10人(通常は要予約) 各回14時～1時間程度)

11月23日(祝)「奈良のこと」 12月4日(日)「1年をふりかえって」

1月15日(日)「温泉」 2月19日(日)「誕生日」

3月19日(日)「春の旅」

場所 白樺文学館1階ピアノサロン

※2館共通年間パスポートをお持ちの方は予約なしでご参加いただけます。

YouTube 稲村雑談特別版第2弾—志賀直哉没後50年を偲んで—

阿川佐和子×山田裕×稲村隆

我孫子インフォメーションセンターアビシルベのYouTubeチャンネルで公開中です。ぜひご覧ください。YouTubeで「稲村雑談」で検索!!

第3弾も制作中です。お楽しみに!



※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お越しの際は、お問い合わせもしくは、市のホームページにて最新の情報をご確認ください。





我孫子通信

文人の郷だより

令和4年度冬号

通信第十



辻説法

館長のつぶやき



第12回 ^{きのさき}城崎温泉につかりながら

▶編集子から「次のお題は「温泉」ですが、辻さんはいつものように自由にどうぞ」と言われた。しかし、温泉と聞いたら城崎温泉のことを書かない理由はない。

▶令和4年7月に初めて城崎温泉に出かけた。学生時代に考古学を専攻していたため、^{たじまこくふ}但馬国府・国分寺の置かれた豊岡まで来たことがあったが、城崎までは足を運ばなかった。この期に及んで城崎に足を踏み入れたのは、白樺文学館の館長として拙文を書いているにもかかわらず城崎に行ったことがない、志賀先生済ませぬ！という半ば罪滅ぼしに似た感情からだ。

▶城崎温泉は、志賀直哉「城の崎にて」（大正6（1917）年）の舞台となる。これは大正2（1913）年8月15日に志賀が山手線との接触事故に遭い、その傷を癒すために10月18日から湯治に訪れた際の出来事を記したもの。また「暗夜行路（後篇）」（^{ほうきだいせん}完結は昭和12（1937）年）でも伯耆大山に向かう主人公が途中で立ち寄るが、実際に該当部分の執筆に当たっていた大正12（1923）年10月21日、志賀は城崎温泉を訪れている。

▶駅前通りを抜けると、^{おおたに}大谿川の流りに沿いに連なる温泉宿と土産物店の家並みに行き当たる。柳の木と時折現れるモダンな橋が良いアクセントだ。色とりどりの浴衣に袖を通した観光客が7つの外湯めぐりに興じている。レトロモダンを売る観光地は数あれど、ミニマムな場でありながらこれだけ賑わっている温泉を他に知らない。

▶城崎温泉は、古くは飛鳥時代にコウノトリが傷を癒していた伝承があり、江戸時代以降は有馬温泉に並ぶ称される温泉街に成長する。鉄道が通じると、志賀、有島武郎、徳富蘆花、泉鏡花、島崎藤村、与謝野晶子・鉄幹、柳田國男など文人たちが湯に浸かりに来ている。この辺りは城崎ゆかりの文人たちについて展示する「城崎文芸館」に行くとよく分かる。

▶志賀の定宿「三木屋」に泊まる。三木屋の建物は昭和2（1927）年建築で国の登録有形文化財となっているが、志賀が泊まった頃のものではない。ご主人に尋ねてみると、城崎温泉は大正14（1925）年の北但馬地震で町全体が壊滅的被害を受けたそうで、三木屋も道を挟んで反対側にあったものを、現在地に建て直

裏面へ続く…

したとのことだ。地震復興はまちづくり全般に及び、川沿いのモダンな橋もこの時期に架橋されたものだそうだ（登録有形文化財）。

▶つまり、城崎温泉には志賀が小説を書いた頃に泊まった宿や温泉は残っていないのだ。しかし、文人ゆかりの温泉地というネームバリューはますます強くなっている。なぜだろう？

▶私が思うに、一つは城崎文芸館の存在が大きいと思う。人は行楽地に訪れる際に何か特別なもの、その土地にしかないものを求めたくなる。日本海側で温泉とカニを出すところはあるが、城崎温泉ほど文学や文化の香りを体験できるところはなかなかない。

▶もう一つは地元の熱意。「城崎温泉の宿は、内湯の規模は小さくして、外湯にお客さんを案内しています。宿の中に売店を設けず、まちの土産物屋さんへ誘っています。まち全体で共存共栄を図ろうとする仕組みです」三木屋のご主人は温泉の如く熱く語られる。「志賀先生をはじめとした文人たちとの繋がりには三木屋だけでなく、城崎温泉の誇りです」とも。

▶翻ってみて、我孫子はどうか？今から100年前に、美しい手賀沼の景観と心安らぐ創作の場所として白樺派を始めとする文人たちが集った地であり、杉村楚人冠記念館や旧村川別荘などの文化財建造物が残る。白樺文学館もある。手賀沼という景観に文化的な価値を付加する仕掛けは用意してあるのだ（カニや温泉はないけれども）。しかし、唯一無二の我孫子のたからとして市民や来訪者の認知が高いとは決して言えない。何が足りないのか？どうすれば良いのか？

▶今、学芸員など若手の職員とも話し合い、時期は未定ではあるが、展示のリニューアルを手がけるプランを練っている。杉村楚人冠記念館などとの連携も強化して、我孫子のたからを示したい。文豪ゆかりの他市の施設とも連携を進めたい。4月からはプロジェクトの入り口となる仕掛けをするつもりでいる。

▶城崎温泉の7つの外湯の一つである「御所湯」につかりながら、こんなことを考えた。私は湯にのぼせたのではなく、志賀先生のように「強い湯の香に、彼は気分の和ぐのを覚えた」のだ。



桃島橋の写真

温泉街の中心を流れる大谿川には5つレトロな橋が架かっています。上流の王橋から、愛宕橋、柳湯橋、桃島橋、弁天橋があり、いずれも弓形橋と呼ばれる形をしています。

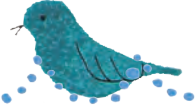
コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

●テーマを温泉にしたところ、温泉一色のおたよりになりました●旅がいまより困難であった時代、当時の人々にとって、「湯治」は精神的にも身体的にも治療の要素が強かったのかもしれませんが●先日、湯西川温泉に行きました。山奥で平家の落人がいたと伝説が残っています。3年ぶりに開催された「かまくら祭り」は素敵でした●イベント再開の報を聞くとき少しづつ世の中が進んでいると感じます●今年は旧村川別荘で「ひなのまつり」も再開します！（K）

我孫子から



文人といえれば温泉である。年明けNHKBSプレミアムにて文豪と温泉が取り上げられていた。城崎話は館長に譲るとしてその他の温泉地の話をしたい。

志賀はゆかりの温泉地は多い。私が今気になっているのは、上州草津、三重菰野、鳥取三朝温泉だ。草津は「草津温泉」(一九五五)にまとめているように何度か訪れており、我孫子時代にも訪れている。その際は「それまで経験した事のない坐骨神経痛」の養生のためと記している。

三重菰野は「菰野」(一九三四)にてその様子が描かれている。当時志賀は奈良に住んでいる時で、そこまで遠くはなかったのだろう。「その日菰野温泉へ行くことを不図思ひ立つた」と記している。本来はここで執筆を進めるつもりだったが、ある事件のことばかりきがり、結局進まなかったというある種「言い訳」が作品になってしまったものである。

鳥取三朝は「鳥取」(一九二九)に描いており、「続創作余談」にて同作品を「何を書かうとしたのか忘れたが、その為め、山陰の温泉に出かけ、書けずに帰つて来て、書けなかつたその時の事を書いて了つた。」とある。やはり三朝行の理由は、持病の坐骨神経痛の養生、そして書き物の仕事と記している。

以前の通信に書いたが、志賀は見聞、経験したことを綴るため、転地(旅行) ↓ 湯治 ↓ 執筆が志賀の健康法ではないだろうかと思つた。何かきつかけを掴みたい、刺激が欲しいという点と、単純に養生に行くという点があるのだろう。私も昨年末ようやく落ち着き、東北旅に出ることが出来た。盛岡まで五百キロの旅。そこから花巻、石巻、郡山、会津東山温泉、猪苗代湖と白樺、民藝、我孫子ゆかりの人々をテーマに旅をしてきた。温泉⇨旅と考えると、やはり時空間を越えて物事を見定めるにはちょうどいい空間が温泉だと思う。令和五年は志賀が我孫子を旅立つてからちょうど百年。今年もまた志賀の我孫子時代に思いをはせ続けたい。(稲村隆)

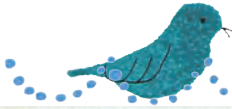


コラム「我孫子から」について
志賀直哉用紙

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語



フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

湯治場として名高い温泉に、秋田県八幡平地域の玉川温泉がある。入ってよし、飲んでよし、吸ってよしという、まさに万能薬と言える温泉である。口に含むと、酸っぱく塩っぱい味がするのが特徴であるようだ。この玉川温泉、以前は鹿湯と呼ばれていたが、青森県の湯治場・酸ヶ湯温泉と区別がつきにくいとのことで、売り出しも兼ねて秋田県湯瀬ホテルの経営者であり、八幡平観光開発の功労者・関直右衛門は改名を考えていた。東北方言では、「し」と「す」が似た響きになるためである。それだけでなく、この地域では酸っぱいことを「酸かい」と言うことから、鹿湯も初めは「酸か湯」と呼ばれていたらしい。なるほどこれは関でなくとも、一刻も早く名前を変えたい事態だ。

そんな折、我孫子の白馬城より白馬の王子様の如く颯爽と登場した救世主が、楚人冠であった。ちなみにこの王子様は、八幡平を巡遊中に落馬し骨折した、ズッコケ大将でもある。楚人冠落馬の不名誉なニュースはあれよあれよという間に報道され、図らずも八幡平の知名度向上に一役買った。これを受け地元の人々は楚人冠への感謝を込めて、落馬を記念する石碑を建立している。人生、自分の行動が何に繋がるか、分からないものだ。

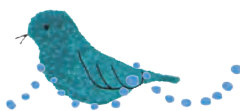
少々話がそれたが、楚人冠は関からの八幡平・鹿湯売り出しのための協力要請に応じ、「玉川温泉」と鹿湯の名を改めることを決めたのである。この玉川温泉とは、秋田を流れる玉川の上流に鹿湯があることから、朝日盛岡支局勤務の今村四郎が思いついた名であった。この案に楚人冠も乗っかり、昭和九年（一九三四）に改名を決定したのである。以上、八幡平でのあれこれは、楚人冠の著書『と見かう見』にて読むことができる。さらに楚人冠は、湯瀬の景勝を爽やかに、そしてしつとりと詠んだ「湯瀬の松風」という小唄の作詞もしている。今回はこの湯瀬の松風に乗ってお別れしよう。

湯瀬の名に負ふ 瀬々の湯の 米代川に立つ烟り 熱い思は七竈 とざして胸にひめ小松 さあらぬ逢瀬
幾かさ松の いつしかそれと 通へ松風

(武藤真奈)



イベント情報



杉村楚人冠記念館											
●3月5日和綴じ豆ノート 1月11日～3月5日 「てがみ展 楚人冠の仕事を支えた人びと」展 3月7日～5月7日 「我孫子を詠む・描く」展											
2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
●復活！稲村雑談 2月19日 ●復活！稲村雑談 3月19日 2月1日～7月9日 常設テーマ展「白樺派と我孫子」展											
白樺文学館											

■杉村楚人冠記念館

令和5年1月11日（水）～3月5日（日）

テーマ展示「てがみ展 楚人冠の仕事を支えた人びと」

ジャーナリストとして、東京朝日新聞社に勤めていた杉村楚人冠は、たくさんの仲間たちの協力のもと、仕事をこなしていました。そんな楚人冠の仕事を支えた人々を、手紙から紹介していきます。

令和5年3月7日（火）～5月7日（日）

春期企画展「我孫子を詠む・描く」

The-Haven Abiko, Chiba-ken…杉村楚人冠が生きていた当時、我孫子は風光明媚な安息の地でした。爽やかな草花、清らかな手賀沼、朗らかな我孫子の住人たち…そんな美しい我孫子を訪れ、魅了された人々の手によって、数々の俳句や絵画が生まれることとなります。この展示では、人々に愛された唯一無二の理想郷、そして芸術家たちにとっての創造力の源である我孫子を表現した作品を紹介します。

令和5年3月5日（日） ①午前10時～午前12時／②午後1時30分～午後3時30分

春のワークショップ「和綴じ豆ノートを作ろう」

参加費：200円（材料費）

ちょっとしたメモにぴったりな、和綴じ豆ノートを作ってみませんか？自分の作った和紙のノートに文章を綴れば、気分は名ジャーナリスト・杉村楚人冠！奮ってご参加ください！

会場：生涯学習センターアビスタ工作室

定員：各回20人、計40人（要予約、先着順）

持ち物：特になし

講師：平田正和氏（工房レストア）

申込方法・問い合わせ：杉村楚人冠記念館への電話（04-7187-1131）。

予約期間は2月18日（土）午前9時よりワークショップ前日まで。

※2館共通年間パスポートをお持ちの方は事前予約受付中です。



■白樺文学館

令和5年2月1日(火)～7月9日(日)

常設テーマ展「白樺派と我孫子2023」

白樺文学館に所蔵されているコレクションを中心に展示を行います。

2022年末山田家コレクションに追加分として約1300点が寄贈されました。追加分には、谷崎潤一郎からの手紙やあの白樺派の人物の弔辞まで・・・白樺文学館史上(楽藝人勤務史上)最高のコレクション展になるよう企画中です。

柳兼子愛用ピアノBGM演奏

参加費:無料(入館料のみ)

開館日は毎日市民スタッフによるBGM演奏を開催しています。11時～か13時～どちらか1時間程度の開催です。市民スタッフの登録者は30人以上。毎日来ても違う方の演奏で展示をご覧ください。

学芸員ギャラリートーク 復活!! 稲村雑談

参加費:無料(入館料のみ)

志賀直哉「稲村雑談」にあやかり、同名の学芸員による展示解説です。2年ぶりに復活です。今回から、展示解説のほかにトークテーマを設定、またピアノ演奏も加えたパワーアップした内容でお送りします。(定員:10人(通常は要予約) 各回14時～1時間程度)

2月19日(日)「誕生日」

3月19日(日)「春の旅」

場所 白樺文学館1階ピアノサロン

※2館共通年間パスポートをお持ちの方は予約なしでご参加いただけます。

YouTube 稲村雑談特別版第2弾—志賀直哉没後50年を偲んで—

阿川佐和子×山田裕×稲村隆

我孫子インフォメーションセンターアビシルベのYouTubeチャンネルで公開中です。ぜひご覧ください。YouTubeで「稲村雑談」で検索!!

第3弾も年度内に公開できるよう制作中です。お楽しみに!



■歴史文化財係より

旧井上家住宅(我孫子市相島新田1)でのイベントのご案内

旧井上家住宅では、2月～4月にかけて様々なイベントを企画しています。予約も必要なイベントもありますので、詳しくは旧井上家住宅のホームページをご覧ください。

1月25日(水)～2月26日(日) / 布佐中学校我孫子市のPRポスター展 / 無料 / 予約不要

2月19日(土) ①10時～②13時～ / 郷土芸能体験 / 参加費無料 / 要予約

3月4日(土) 10時～ / 古民家ヨガ / 300円 / 要予約

3月18日(土) ①11時～②11時35分～ / 布佐中学生によるお茶会 / 400円 / 要予約

4月15日(土) ①11時～②13時～ / 土蔵でコーヒー染め体験! / 300円 / 要予約

予約は文化・スポーツ課歴史文化財係までお願いします。(04-7185-1583)

※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お越しの際は、お問い合わせもしくは、市のホームページにて最新の情報をご確認ください。

